郷土史への扉

霧島六社権現

霧島神宮は、当初高千穂峰中腹の※1背門丘にありましたが、度重なる火山噴火によって焼失し、現在の地に造営されました。今年は霧島神宮の社殿が正徳五（一七一五）年に造営されてから三〇〇年を迎えることから、霧島神宮に関連した内容をシリーズで紹介します。

霧島神宮

今回は、霧島山を囲むように鎮座している「霧島六社権現」を紹介します。

霧島六社権現とは

霧島六社権現とは、霧島神宮（霧島市）、霧島東神社・狭野神社（高原町）、東霧島神社（都城市高崎）、霧島岑神社（小林市）の五社の総称です。以前は文字通りの六社でしたが、霧島岑神社と夷守神社が明治六（一八七三）年に合祀されたため、現在は五社となっています。六社権現の御祭神は日向三代をはじめ天孫系の神々ですが、本来は霧島山そのものを御神体とした「霧島御山信仰」でした。

また、最近では観光的な意味合いで、えびの市の「白鳥神社」や、高原町の「霞神社」を入れて六社とすることもあるようです。

霧島六社権現にはほかに、「霧島六所権現」という表現があり、しばしば混同されているようですが、六所の「所」は、神仏や貴人を数えるのに用いる語であり、場所のことではありません。日向三代の※2夫婦六座を祀っているので六所権現といいます。

性空上人とは

霧島六社権現や白鳥神社、霞神社を整備したのは、十世紀、村上天皇のころ、天台宗を奉じ修験道信仰を確立した性空上人です。

性空上人は霧島でも修行して霧島山信仰を体系付けた人物です。高千穂峰頂上にある「天の逆鉾」も、この性空上人の流れをくむ修験者が置いたものではないかといわれています。

応和三（九六三）年、三十六歳のとき、霧島山の山中で四年の間苦しい修行を積んだ後、京都に帰りました。その後、兵庫県の書写山に円教寺を開山し、弥勒寺で寛弘四（一〇〇七）年※3八十歳で※4入寂しました。

性空上人は霧島滞在中、狭野神社の※5別当寺神徳院の再興や霧島東神社別当寺錫杖院の開山をはじめ、農業の指導や市を開くなど、大いにこの地域の振興に努めました。霧島山中には、性空上人の足跡が至るところに残されています。霧島東神社近くの絶壁の洞穴に性空上人の石像が安置されています。ここは性空上人が護摩供養をしたところで、御池の七港の一つ「護摩壇港」の名が残っています。

霧島山と六社権現

霧島山は、修験者が修行する神聖な地であり、当時の霧島山の火山活動は桜島よりはるかに活発であったことから「恐山」として畏敬と信仰の対象でありました。

霧島六社権現のある場所は、共通して霧島山の入り口にあるように思います。これは、穢れを落して身を清めてから入山するために、神社を置いたとも考えられます。穢れたまま入山すると山の神が怒る、すなわち火山噴火につながることを恐れていたのではないでしょうか。

東日本大震災のとき、神社や祠の位置が津波の被害を免れた境界線であったように、霧島六社権現もそれぞれ意味のある場所に建立されているのではないでしょうか。

（文責＝鈴）

※1 御鉢火口東端から高千穂峰山頂との間にある鞍部。
※2 瓊々杵尊・木花咲耶姫命・彦穂々出見尊・豊玉姫命・鵜葺草葺不合尊・玉依姫命
※3 延喜十（九一〇）年生まれ、九十八歳で亡くなったという説もある。
※4 徳の高い僧侶が亡くなること。
※5 江戸時代以前に神社を管理するために置かれた寺のこと。